

音モノ語り

わたしの相棒

4

コントラバス奏者
幣隆太郎

ドイツの名門オーケストラに在籍し、コントラバス奏者には珍しいソリスト（独奏者）として活躍する。オーケストラで最低音域を担うコントラバスは、和音の土台を支える縁の下力持ち。バイオリンやチェロのように主旋律を奏でることはあまりなく、ソロ向けの曲も少ない。そのため幣は他の楽器の曲を厳選し、音程やテンポを調整して奏でる。

ゆつくりと流れだした弦の重低音は、苦しい胸の内を明かす独白のようだ。暗い情感に満ちた旋律を奏でる音色は時にうなり、切なそうに泣く。最後の盛り上がりは、悲しみから奮起していく息遣いに聞こえた。

見たこともない美しい楽器だった。弾けば普通はどこかに鳴りにくい場所があるのに、高音から低音までまんべんなく豊かに鳴った。ちょうど使っていた楽器に表現の制約を感じ始めていたころ。いい時期に巡り会えた。

19世紀ドイツの作曲家ヨハネス・ブラームスの名曲「チェロ・ソナタ第1番」。その名の通りチェロ用に使われた曲だが、幣隆太郎はより大きく、低音のコントラバスで弾く。いかにも重く鈍そうな楽器が、幣の手で意思を備えたかのように太く深い音で歌い出す。

コントラバスの音は人の低い声。地味で不器用と言われ続けてきた楽器だけど、下から響いてくる音は人の心の奥深くをつかむようで、チェロとは違った味わいがある。

コントラバス奏者の父とバイオリン奏者の母の間に生まれ、10歳から弾き始めた。息子をソリストにすることが夢だった父は、大阪にいた最も信頼する奏者奥田一夫（故人）に幣を習わせた。父が8ミビデオでレッスンを撮影し、家でも弾き方を研究。最初の楽器は小さめのサイズだが、太い弦は大人と同じ。幼い手指は毎日悲鳴を上げたが、うまく弾けない悔しさに泣きながら練習した。

表現の限界破る、豊かな響き

イタリア製「パロッタ」

ソリストの意識が芽生えたのは東京芸大入学後、世界的チェロ奏者ヨーヨー・マのCD「パツハ無伴奏チェロ組曲」を聴いたときだった。周囲には社交的に映っていたが、内実は対人関係に苦しみ、不眠になっていた。

もっと音楽で突き抜きたい気持ち強く、同級生らとの温度差を感じてしんどかった。ヨーヨー・マの演奏に「音楽でこんなに話せるのか」と衝撃を受けた。何の楽器かなんて超越した音楽。自分もそうすればいいんだ、と。人生であんなに救われたことはなかった。

大学3年の夏、ドイツに渡った。言葉もできず現地に入る大学も決まっていなかったが、前年に旅先のウィーンで聴いた世界最高峰のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の音が忘れられず、居ても立ってもいられた。母は「せめて卒業だけは」と止めたが、父は「すぐに行け」と背中を押した。

それから16年。幣はドイツにすっかり根を張っている。首や肩、腰、腕、体を痛めては弾き方を見直し、音を磨いた。山の上にあるオーケストラの練習場からは夜も、幣が一人残って弾き込む音が風に響ってくる。

音楽が好き。だから頑張れる

舞台上の幣には、その喜びがふれる。毎年、故郷・神戸で開くリサイタルではコントラバス用に書かれた曲を発掘し、披露する。昨年は初めて作曲家に委嘱した新作を初演。食欲にソロの可能性を追求する。

大きな楽器だからハードケースに入れて持ち運ぶときは、重くて嫌になる。でも、やっぱり好き。最近そう思えるようになった。やっと本当の良さが分かってきたのかな

（記事・松本寿美子、写真・後藤亮平）



リサイタルにて。幣の低音が聴衆の心を揺さぶる



およそ230年の時を刻む

NEXTに
動画

CD

- 「ザ・サウンド・オブ・ダブル・バス」。ピアノは小菅優。ブラームスのチェロ・ソナタ第1番などを収録。（3000円）＝料金は税込み＝公演
□2018年2月24日14時、神戸文化ホール。「クラシック プラス特別演奏会」に出演。鈴木優人指揮、神戸市室内合奏団。一柳慧、モーツァルト、ベートーベン作品。S席4000円、A席3000円、25歳以下1000円。17年11月11日から発売。同ホールプレイガイド☎078・351・3349

聴く



装飾の渦巻き



「一生、理想の弾き方を探す」

◇第4土曜に掲載します。